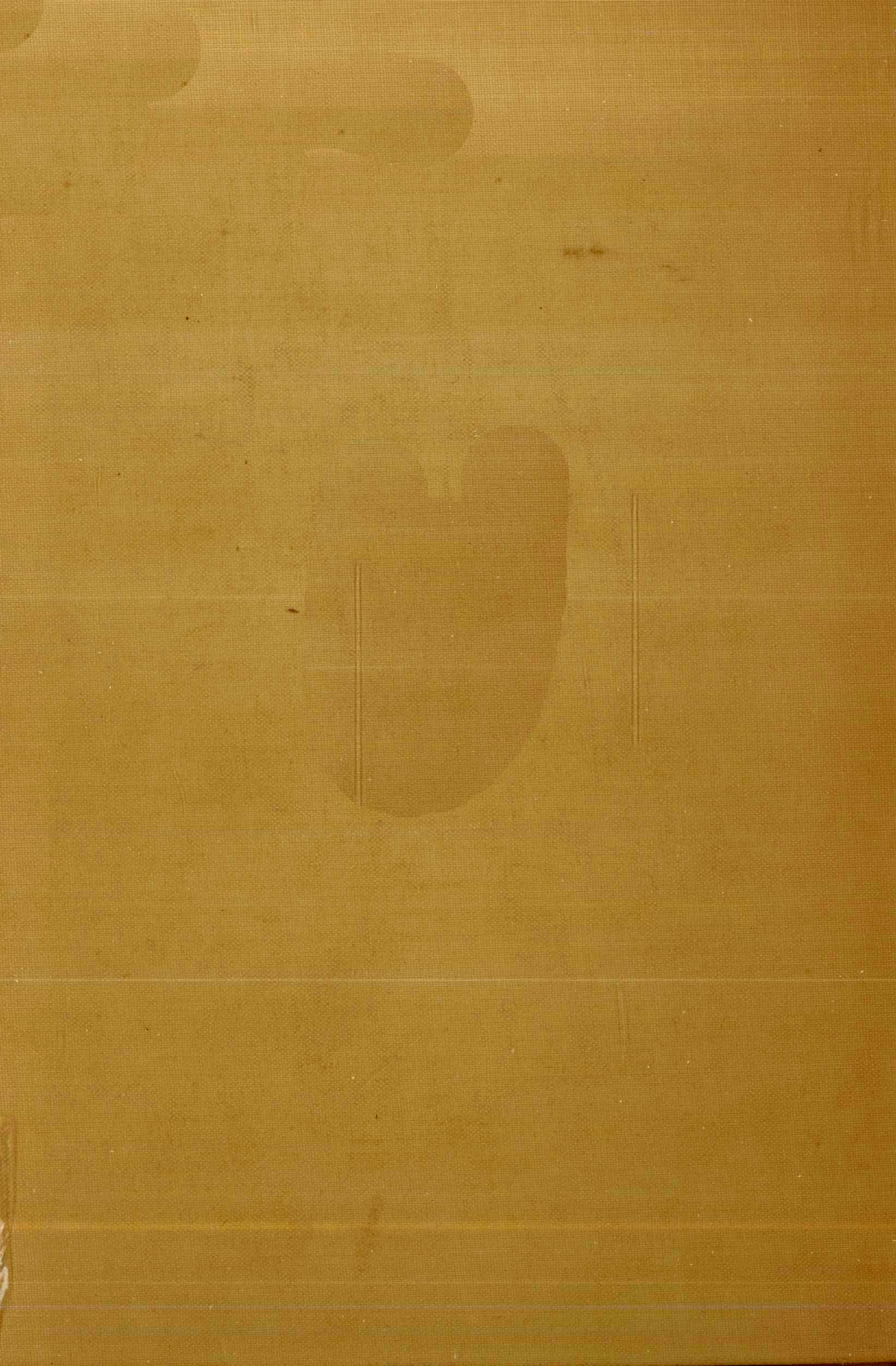




平川祐弘編
鶴田欣也



川端康成『山の音』研究

明治書院

川端康成『山の音』研究

定 価 4,800円

昭和60年9月15日 印刷

昭和60年9月20日 発行

編著者 平 川 祐 弘
鶴 田 欣 也
発行者 株式会社 明 治 書 院
代表者 三樹 彰
印刷者 奥 村 印 刷 株 式 会 社
代表者 奥村正雄

発行所 株式会社 明 治 書 院
東京都千代田区神田錦町1-16 郵便番号101
電話(03)292-3741(代) 振替口座東京3-4991

©S. Hirakawa & K. Tsuruta 1985

高陽堂 製本

3093-20171-8305

平川祐弘編・川端康成『山の音』研究
鶴田欣也

目次

まえがき……………平川祐弘……………五

第一部 作品としての『山の音』

まぼろしからうつつへ——『山の音』の錯覚と発見……………鶴田欣也……………二六

信吾の眼……………川本皓嗣……………五二

第二部 日本伝統の中の『山の音』

知る者と知られる者……………アール・マイナー……………九四

——『山の音』試論——

まぼろしの紅葉をたずねて……………上田真……………二五

——『山の音』における理想美追究の八つの型——

川端康成における aestheticizing 平川祐弘……一五

——『朝の爪』に見られる一原型——

二人の老ブレイボーイあるいは好色者のこと 萩原孝雄……一七

——『山の音』と『瘋癲老人日記』における距離と象徴——

第三部 世界文学の中の『山の音』

もののあわれを解する人と解さぬ人 平川祐弘……二〇

——『山の音』における人と自然の交感について——

川端康成の『山の音』とマーガレット・ローレンスの

『石の天使』 鶴田欣也……二七

『山の音』の〈家〉と〈人〉 川崎寿彦……二六

——『ハワーズ・エンド邸』との比較から始めて——

『山の音』と『失われた時を求めて』における時間と

反時間 ロイ・スターズ……三二

花と沼地 アンソニー・V・リーマン……三七

——『山の音』と『ベニスに死す』における蓮の意味するもの——

『山の音』研究評価の動向	萩原孝雄	三六九
解釈する者、解釈される者——あとかきにかえて——	鶴田欣也	四二一
執筆者紹介		四三三

まえがき

平 川 祐 弘

川端康成『山の音』について内外の学者九名の十二篇の論文を刊行するに際し、その成立事情について一言したい。本書は一九八四年五月二十三日から三日間、カナダ、ヴァンクーヴァーのブリティッシュ・コロンビア大学で開催された日本シンポジウムの第一部門「近代日本文学」に提出された九人の九篇の原英文のペーパーの日本語版を中心に構成し、それに鶴田、平川の各一篇、萩原の研究史について的一篇を補足したものである。

『山の音』についての国際会議がカナダで開かれたのはひとえに同地の大学の近代日本文学担当教授が鶴田欣也氏であることによる。氏は東京に生れ、上智大学英文科を出、ただちにアメリカに学び、その後は北米で英語で日本文学を講じている教授で、川端研究の最前線に位置する学究である。鶴田氏はまた招集者として実に巧みにこの会議を組織した。あらかじめ参加者全員にペーパーを提出させ、全員が他の参加者のペーパーを読み、そのコメントを書いて提出し、参加者全員が他の参加者のコメントをあらかじめ全部読んだ上で、会議の場に臨む、その上で三日間集中的に討議する、という方針を立て、それを實際きちんと守らせたのである。その組織者としてのまた座長としての鶴田博士の配慮と熱意と演出がなければ本書の編集は出来なかったであろう。ここに集めたペーパーは、右の会議での討議を経て、更に各自が加筆したものである。『山の音』研究としての各論文の意味については、鶴田教授が「あとがき」でふれる予定なので、私はこの「まえがき」では、いわゆる国文学研究とは異にする経緯を踏んで生れた本書の特質を、西洋における日本文学受容や研究の歴史の中で位置づけてみたいと思う。その際、日本における西洋文学受容や研究の歴史を平行例として掲げ、読者の参考に供したい。

周知のように日本においては明治以来、西洋文学の翻譯と紹介が非常なる熱意をもってなされた。これは当時の日本が国をあげて推しすすめた文明開化運動の一環として行われたものである。西洋文明の方が文学の面においても進んでいるという自覚のもとに、ひたすら西洋文学を学ぼうとつとめた結果でもあった。その点で欧米諸国の日本文学受容や研究の態度とはなだ異なるところがあった。アメリカ合衆国などは日本と戦争し、日本を占領し、支配者として臨むうちに日本文学を発見したという逆説に満ちたプロセスをたどったからである。『山の音』は占領下の日本の風俗を描いた側面もある小説だが、しかしそのような川端の一作品について北アメリカの地で日加米三国の学者が三日間一室にこもって議論したことを思うと、太平洋戦争終了後四十年の間に世の中もずいぶん変わったものだという感慨を覚えずにはいられない。

ところで日本が西洋文学を熱心に学んだのは日本が西洋文明の強烈な衝撃インパクトを受けたからであるが、同じように強烈な衝撃を受けた国の中で日本ほど熱心に西洋文学を摂取した国は東アジアにも西アジアにも南アジアにもほかになかったのである。非西洋の国の中で日本以外の国としてはロシアがもともと古くから熱心に西欧文学を学んだ国であらう。ただしそのロシアは広い意味ではキリスト教文明圏と一翼をになう西洋の国でもあったのだから、近代日本における西洋文学摂取の事例はやはりとくに注目し値いすることであらう。その際の日本人の態度は一言でいえば謙虚であり、日本人は己れを空しうして西洋文学を学び、自分自身をそれに同化させ透入を試みたように思われる。

ところで研究とは対象を自己から突き放し、客観的に觀察し分析することによって遂行し得るものである。日本人はおびただしい量の西洋文学を読み、訳してきたが、その際の態度が右に述べたような同化透入本位であったために、自己本位の立場に立脚して、しかも外国人をも納得させ得るような、真に秀れた研究はいまだに意外に数少いようである。辞書作製とか語註とか翻譯とかの方面では多大の成果をあげている日本の外国文学研究であるが、客観的な解明や分析、あるいは自己の趣味性に立脚した裁断や文芸批評等で、長く広く海外でも読まれるに足るような著述はほ

とんど見あたらないのではあるまいか。

しかし文学、それも外国文学に対する際には享受することがまず肝心で、その文学に魅力を感じた人が、愛するものを所有したいという欲求のあらわれとして翻訳を行うこと——それが第一義的な仕事だとする立場ももちろんあり得る。明治日本における森鷗外の活動はまさにそれであった。鷗外が明治大正の文壇に重きをなしたのは、単に創作によってのみではあるまい。鷗外は西洋の詩や散文や演劇の翻訳によっても当時の文学界を常にリードしたのである。その鷗外の翻訳作品の文体は、当時の日本語の最高水準を行くものであった。近代日本の数ある翻訳者の中で鷗外の名前がとくに記憶される所以である。

西洋における日本文学も、研究よりも先にまず翻訳があった。日本文学を世界文学の舞台の上へ押出すことに成功した人は英国人アーサー・ウェーリーである。日本文学の英訳は内外の人によりそれ以前から行われていたが、日本という極東の国に秀れた文学があるという国際的認知が得られるようになったのは、両大戦間にウェーリーが『源氏物語』『枕草子』『謡曲集』などを英訳して、それをイギリスの文壇で認めさせたからである。それはウェーリーの翻訳作品の英語文体が千九百二十年代三十年代の英訳の最高水準を行くものでもあったからだろう。

森鷗外は西洋詩歌の訳詩集『於母影』によって日本に「新体詩」という新しい詩型式をもたらした人だが、実はウェーリーも白楽天などの漢詩を訳することで英語世界に新体の詩をもたらすのに成功した人である。このような平行情例は、異文化の核心にひそむ詩を解し、その詩を母国語の詩に移し植える心得のある人によって、はじめて異なる文化圏の詩文の真髄は伝わるのだ、ということを物語っているのではあるまいか。

さてそのような前史を踏まえた上で、第二次世界大戦後の西洋における日本文学を見てみよう。過去四十年間、米国を中心に日本文学の翻訳者や教授たちの数は急増し、日本文学の主要な作品は次々と英訳された。当初は自分の好きな作品を取りあげて英訳する自由があったが、次第にその自由の幅も縮った。なかには既訳が存するにもかかわらず

ず新訳が試みられる場合も出て来た。米国の日本学者はその種の活動の発展を非常に誇りとしているが、しかしだからといって日本文学が欧米読書界の中心近くにまでのしあがったというわけではない。この点については一部に非常に大きな錯覚があるので次の点はくれぐれも注意しておきたい。率直に言って、兩大戦間にウェーリーの訳が出て、『源氏物語』がイギリスの文壇で感嘆をもって迎えられたほどには、戦後は米英では日本の文学作品は読書界の中心部まで進出していない、ということである。

そのようなことをいえば、人々はすぐドナルド・キーン教授やエドワード・サイデンステッカー教授の名をあげて、彼等のおびたしい翻訳作品の名前を列挙するであろう。確かに二人の名前は日本でも、また米英の日本学界においててもまことによく知られている。しかし米英の作家たちや一般読書界においては残念ながらかつてのアーサー・ウェーリーほどは知られておらず、読まれてもいないのである。これがブルームズベリー・グループと交流もあり、パウンドやエリオットとも親しく、ロンドンの文壇でも知られていたウェーリーと、東京の文壇でこそ知られているが、ニューヨークでは必ずしもそうでない人々との間の決定的な違いであろう。実際、米国の作家や詩人たちの何人がキーンやサイデンステッカーの名前を知っているかと思うとはなはだ心もとない気がする。それは日本でノーベル文学賞を受賞したユーゴスラヴィアやスペインの作家の翻訳者の名前を人々が知らないのとはほぼ同然であろう。そして付言するならば、日本でもノーベル文学賞を受賞したユーゴスラヴィアの作家やスペインの詩人の名前が人々に記憶されていないと同様に、川端康成の名前も、日本人一般が期待するほど、知られているわけではないのである。作家が外国に知られるためにはやはり外国の大作家に認められなければならないのではないだろうか。その点でアカデミー・フランセーズの作家マルグリット・ユルスナールに知己を得た三島由紀夫は幸福といふべきで、ユルスナールの『三島あるいは空虚のヴィジョン』（河出書房）にはジョン・ネイサンの三島評伝などよりはるかに深い理解と同情に富む解釈が示された箇所もある。作家は作家を知るといふべきであろう。それに引きかえ、川端康成はいまだにそ

の種の外国作家の知己に恵まれていないのではあるまいか。

ここで翻譯家の問題にもふれておきたい。日本では開国後一世紀ほどの間に西洋文学の主要作品はおおむね邦訳され、中には何種類も訳のある作品も多い。それは日本にそれだけ翻譯文学を読む読者層がいるためであり、複数の翻譯家たちや出版社はその読者層のシェアを奪いあつてきたのである。しかしそのような商業的動機以外にも新訳の出る要因はある。過去百年の間に日本語に対する読者の趣味性や感受性の變化に伴い、新訳が求められるようになりもしたからである。西洋においてもそれと似た事情が見られる。両大戦間にウェーリーが『源氏物語』を訳する際に用いた英語は、息の長いセンテンスから成つていた。それは半世紀後のアメリカ人読者の趣向にはもはや合致しない面がある。彼等はずっと簡潔な英文を好む。サイデンステッカーの新訳が出てくる余地はそのような文体上の趣味性の變化からも生れるわけで、『源氏物語』の原文そのものが別に簡潔であつたわけではない。サイデンステッカーは自分の新訳のレーゾン・デートルを強調するために『源氏物語』の原文そのものが *brisk* で *laconic* である、と言っているが、それはおかしい。きびきびして簡潔なのは清少納言の文体であつて、紫式部の文体はむしろそれとは対照的な特性を有している。しかし問題はおそらくその点にあるのではないだろう。訳者は母国語に訳す以上、その時代の母国語の最良のスタイルに訳せばよいのである。

9 ま え が き
訳者としてのサイデンステッカー教授の問題は日本人読者にとっては興味の薄いことであり、英米の若手の日本学者がその点についてはもっと遠慮なく論じあえばよいことであろう。しかしヴァンクーヴァーでの會議はすべて英語で行われた。そのため『山の音』についてもサイデンステッカー氏の英訳が引かれる場合が多かつた。それでこの場を借りて気がついた二、三の点を率直に指摘しておきたい。まず第一に氏の訳には意外にケアレス・ミステークが多いということである。タトル社版 *The Sound of the Mountain* の一九五ページ *Into such depths Shuichi had been pushed* は「修」でなく「信吾」であり、一二七ページの *Close the door, please, Fusako.* は「房子」でな

く「菊子」である。その種の誤りは単なる粗忽であるが、八九ページの「島の夢」の章の、

しかし、夢で娘を抱擁したり、面をつけた英子が可憐だつたり、慈童に接吻しかかつたり、あやしいことが續くのは、うちにゆらめくものがあるのかと、信吾は考へてみた。

の最後が、something was about to shake the foundations of his house と訳されているのに接すると、これはやはり訳者の内容理解の程度を示唆するだけに、看過できないものを含んでいるように思われる。

しかしその種の瑕瑾が散見するにせよ、私はサイデンステッカー氏の英訳を原文と照し合せて通読してまことに興味深く思った。日本語原文を英語に移し変える手並みは鮮やかなもので、それは和英辞典に頼りがちな日本人の英訳文と違って実に自在で生き生きとしている。もし将来、日本文学の秀れた英訳文を広く集めて、それを原材料として和英辞書を新たに編むならば、さぞかし言いまわしの豊かな役に立つ辞書が出来るのではないか、とも思われた。なおここで繰返すが、日本文学の英訳は原則として英語が母国語でない人は行うべきではない、ということである。日本でも岩波文庫にイタリア人神父の手になるマンゾーニの訳があるが、それは日本語としていかにも読みづらい訳であり、そのためにマンゾーニはつまらないという偏見を日本人読者に植えつけてしまったと似た事が川端についても起るのではないか、と懸念されるからである。

翻譯の次に文学研究の問題に移りたい。西洋文学の主要作品がことごとく邦訳されると、日本の外国文学研究の学徒は「研究」を開始した。その中には本国の学者と同じ土俵に上って研究することを意図した者もあれば、他方、日本人としての主体性を維持しつつ評論するという動きも見られるようになった。

西洋でもウェーリーの『枕草子』の抄訳は、金子元臣の註釈に依拠したものであるが、ウェーリー自身のコメント

がいたるところに混っており、その点が日本人読者にとってはアイヴァン・モリスの『枕草子』全訳よりもよほど興味深い読物になっている。その種のコメントこそ日本人読者も学究も外国人研究者に期待しているものではあるまいか。(そして実を言えばその種のコメントこそ、日本人がシェイクスピアに対する時も、ゲーテに対する時も、ダンテに対する時も、下してしかるべき性質のものではあるまいか。)

しかし戦後のアメリカの日本文学研究は、マサオ・ミヨシも言うように、⁽²⁾ 翻訳・紹介の業績の目覚ましいことは事実である反面、米英の日本文学者が米英文学批評家の代表でないこともまた残念ながら事実のようである。翻訳と紹介は外国の日本文学者の主要任務であり、伝記的ないしは文芸批評的研究は自国の文学研究者が分担すべき任務であるのかもしれない。とはいっても日本人も外国文学を「研究」しようとするなら、外国人が日本文学を「研究」することも当然期待されてしかるべきはずである。そのような昨今の状況下で、日本文学を世界文学の中に引き出して論じようとする二つのシンポジウムが開かれた。一つは一九八二年夏インディアナ大学で開かれた『源氏物語』についての国際会議であり、いま一つは一九八四年五月、カナダ、ヴァンクーヴァーのブリティッシュ・コロンビア大学で開かれた川端康成の『山の音』についての国際会議である。前者が日本の古典文学の一作品について海外で開かれた最初の国際会議であるとするなら、後者は日本の近代文学の一作品について外地で開かれた最初の国際会議であるといえよう。その『源氏』会議については、あれは日本の『源氏物語』についての学会発表と、それと並行してそれとは全く別の英語の *The Tale of Genji* についての学会発表とが同時に開かれたまでで、と酷評する人もあるやに仄聞する。しかし『山の音』会議については、そのような二分裂は全然見られなかった。いま本書の母胎となったそのシンポジウムについて私見を述べたい。

『山の音』をめぐる国際会議が一つのきわめてまとまりの良い集会となり得たのは、座長の鶴田欣也教授が、日本生れでありながらカナダ国籍をもつ学者であり、川端の世界に精通している文学好きでありながら、英語でそれを語

って人を飽かせない巧みな語り口の持主だからでもある。鶴田教授は会議を招集するに際して『山の音』をそれ以外の文学作品との対比において論ずること、用語は英語であること、という二条件を課した。川端論のこの会議にカナダの英語作家マーガレット・ローレンス、フランス語作家ルイ・エモン。ほかにE・M・フォースター、マルセル・ブルースト、トーマス・マン、ジェーン・オースチンなどの西洋作家。和泉式部、蕪村、谷崎潤一郎などの日本作家。また『山の音』以外の川端の作品が取りあげられているのは、そのような前提条件に由来する。そのような国境を越えた文芸比較を共通の作業条件として課したことが、川端文学の特質を浮彫りにする上にも、またこの会議を広く開かれた意見交換の場とする上にも有効であつたかに思われる。その反面、その種の条件を課せられたために日本の国文学畑の川端専門家がこの会議に参加できなかったことは、止むを得ぬこととはいえ、いかにも残念なことであつた。三日間の会議は、参加者全員が他の参加者のコメントに対する釈明や質疑、見解の補足を一まわり行つた後、さらにもう一度全員が一まわり意見を表明するという形で行われた。それだけの討議を経、食事やコーヒを飲む間にも意見交換は絶えなかつたので、部分的には最初に提出した論旨を訂正した向きも見受けられる。しかしあくまで自説を守る論旨もまた少くないように見受けられる。その多種多様の『山の音』論の意義については鶴田教授が「あとがき」で座長として加えた感想を読まれたい。

日本の読者の中には『山の音』についての討議がなぜ英語で行われたか、ということについて疑問を抱く人もいるかもしれない。しかし川端康成の文学が世界文学の一翼として認められ、ノーベル文学賞を一九六八年に受けたのもそれが英語に訳されたからだ、という事実は忘れてはならないと思う。また日本生れの鶴田教授が北米で英語で『山の音』を講義していることをなにか奇妙な現象のように見做す人もいるかもしれない。しかし北米ではフランス系のアメリカ人が英語で仏文学を論ずることも、イタリア系のアメリカ人が英語で伊文学を論ずることも、実にしばしば見かける情景なのである。そのような国際場裡に近代日本文学の一作品を引き出して、多角的な光を当てては決

して意味のないことではないと信ずる。

今回の会議で『山の音』を他の作品といかに比較論評するか、という方法論上の問題は発表者各自の裁量に委ねられた。ローレンスとエモンという著名でない作家が、フォースター、ブルースト、マン、オースチン等と共に並んでいるのは、その二人が会議開催地のカナダを描いたという理由に依る。鶴田教授は正教授として過去十数年来、私も客員教授として一年をカナダの地で送った者として、いわばカナダ孝行をしたのである。第一部「作品としての『山の音』」、第二部「日本伝統の中の『山の音』」、第三部「世界文学の中の『山の音』」の配列は内容に応じて二人の編者で按配した。「日本文学の伝統の中」で考える場合でも、海外からの視点で見る時は別種の視野が新鮮に開けてくる。それが国内の視点で見る時の「国文学の伝統の中」の川端と異なる所以であらう。

一九八四年のヴァンクーヴァーの新渡戸・大平記念日本シンポジウムは国際交流基金、いいかえれば日本国民の税金から出された援助の下に開かれた。その全部門の研究成果の英語版も *University of British Columbia Press* から刊行を予定されているやに仄聞するが、あまり期待はできないことではあるまいか。いずれにせよ、それに先立ち日本語版をこのような書物の形にまとめて世に問うことの出来たのを参加者の一人として愉快に思う。あのシンポジウムは私たちにとっては学問の祭りであった。その会議開催の裏方をとめた McGee 教授以下関係各位に謝意を表す。書物作製の段階では明治書院の相川賢伍氏を煩わした。氏はきわめて的確な判断力の持主で、在外執筆者で連絡がつかない場合に限り、氏と私と協議の上、表現などに多少手を入れた箇所がある。記して相川氏に謝意を表する。

註

- (1) 米国西海岸の詩人たちの間でつとに知られ高く評価された日本学者は、一九六四年に亡くなった R・H・ブライスで、*Byth: Haiku* (北星堂) は一部では聖典視されている。ブライスは記述にドグマティックな箇所もあり、米英の日本学界で無視されてきたけれども、その俳句理解は深く、明治に来日した B・H・チェンバレンの俳句論などに比べると雲泥の差の

ある秀れた業績である。川端文学における俳句的特質が再三話題となっているが、外国文学徒にはブライスの著書を俳句入門にすすめたい。ブライスの四巻本の *Haiku* と二巻本の *A History of Haiku* はこれから先も詩心ある西洋人にインスピレーションを与え続けるであろう。

(2) マサオ・ミヨシ「アメリカから見た日本の漱石研究」、三好行雄ほか編『講座「夏目漱石」第五卷、三九九ページ。有斐閣、一九八二年。